

## Web講演 第2話 —— 勝五郎の「この世」の旅 ——



今井秀和  
(大東文化大学非常勤講師  
蓮花寺佛教研究所研究員)

江戸時代後期の文政5年、西暦でいえば1822年のこと。生まれ変わりを果たしたという少年「勝五郎」が評判になった。勝五郎の転生をめぐる騒動は公的な文書に記録され、知識人たちの関心を集めた。

### 勝五郎のふしぎな語り

ことの発端は、武蔵国中野村に住む「小谷田勝五郎」<sup>1</sup>が、自分の前世は程窪村に住む「須崎藤蔵」<sup>2</sup>という少年だった、と語り始めたことにある。程窪村の藤蔵は、父の名を「久兵衛」、母の名を「しづ」といい、自身は6歳のときに病気で亡くなったという。

はじめ、勝五郎の話は家族からまともにとりあってもらえなかった。ただ、彼を可愛がる祖母が半信半疑のまま、近所の人に「程窪村の久兵衛」なる人物について訊いてみた。すると、たしかに久兵衛はいたが、死んでしまった、その息子も幼くして病気で亡くなってしまった、というのである。

勝五郎の語る内容との一致に驚いた祖母は、文政6年の1月20日、勝五郎を連れて中野村から程窪村へ行き、真偽を確かめることにした。

### 勝五郎と祖母の「小さな旅」

勝五郎と祖母の二人は山道を越えて程窪村に向かった。勝五郎は、はじめて程窪村を訪ねるはずなのに、村内のことをよく知っていて、迷わずに祖母を藤蔵の家へと案内した。さらに勝五郎は、藤蔵本人でしか知らないような、須崎家の周囲のことを細かく言い当てるので、藤蔵の母をはじめ、須崎家の人々はとても驚いた。これを機に、小谷田勝五郎を生んだ小谷田家と、須崎藤蔵を生んだ須崎家とは、親類のようなつきあいをするようになったのだった。

勝五郎と祖母が歩いた中野村から程窪村への道のりは、全長5キロにも満たないような短い距離であった。地理的には、非常に狭い範囲のことであり、中野村と程窪村の住人どうしには行き来もあった。しかし、幼い子供と老人が歩いたのは、村と村をつなぐ細い山道であった。そして、幼い勝五郎少年にとって、中野村から程窪村への道のりは、自らの前世をたどる「小さな旅」でもあった。

ちなみに、勝五郎が八王子から日野にかけて歩んだと思われる当時の旅路は、自動車道や

<sup>1</sup> 小谷田勝五郎 武蔵国中野村（現在の東京都八王子市東中野）に住んでいた少年。自分の前世が程窪村の須崎藤蔵であったと語り、周囲の大人たちを驚かせた。

<sup>2</sup> 須崎藤蔵 日野市程窪（現在の東京都日野市程久保）に住んでいた少年。6歳の時に疱瘡という流行り病で命を落とした。

鉄道、住宅地の開発によって、過去の記憶の中に埋もれてしまった。しかし近年、日野市の「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」による古文書や古地図の解説、そして現地調査によって、勝五郎が歩んだ道のりが明らかとなった。この検証によって発見された旧道の一部は、奇跡的に中央大学の多摩キャンパス敷地内に残っており、「勝五郎の道」<sup>3</sup>と名付けられて保存されている。

勝五郎が生まれ変わりについて語り始めた頃、この話は、今でいう東京の西にある「八王子」のごく一部のコミュニティで噂されるものだった。地理的に言っても、噂の規模で言っても、とても限定的なものだったわけである。

ところが、その小規模な噂が、勝五郎の「中野村」から「程窪村」への「小さな旅」を起点として、より広い範囲へと広がっていくことになる。そして、勝五郎の生まれ変わりにまつわる話が広まっていく過程には、勝五郎や、彼をとりまく人々が歩いた、幾つものさらなる旅が深く関わっているのであった。

### 池田冠山の「中野村への旅」

たとえば、鳥取藩支藩の大名を隠居し、著述活動などを行っていた池田冠山<sup>4</sup>は、勝五郎の話を知りたいために江戸から中野村の小谷田家までやってきた。勝五郎は物怖じしてきちんと話せなかったため、祖母が代わりに勝五郎の語りを再現した。

大名だった人物が農民の家を訪ねること、しかも、このような変わった目的で訪ねることは当時において異例中の異例だったと言える。池田冠山は、愛娘の露姫を藤蔵と同じ6歳、しかも同じ疱瘡で亡くしていた。

おそらく冠山は、露姫も藤蔵と同じように、どこかに生まれ変わっているのではないか、という可能性を信じていたのだろう。冠山による、江戸から武州中野村への旅は、露姫の魂の行方を尋ねる旅のはじまりでもあった。

池田冠山が『勝五郎再生前生話』という本をまとめて周囲の知識人に見せたことにより、勝五郎の話はさらに広がっていく。

### 平田篤胤の「京都への旅」

こうして文政6年に、勝五郎は江戸の知識人達の注目の的となった。中野村の領主である旗本、多門傳八郎<sup>おかどでんはちろう</sup>は、勝五郎と父・源蔵を、江戸へと呼びだした。中野村での騒ぎが次第に大ごとになってきたためである。勝五郎にしてみれば、この時はじめて、江戸への旅を経験することになる。田舎の子どもにとって、はじめての江戸は驚きの連続だったことだろう。

多門は源蔵と勝五郎から聞いた話を文書にまとめて、上司である御書院番頭<sup>ごしょいんばんがしら</sup>に提出した。この「届書」の写しは、多くの文人たちの手にわたることになる。

<sup>3</sup> 勝五郎の道 幼い勝五郎が中野村から程窪村へ行った際に歩いたと思われる旧道の一部。中央大学多摩キャンパス（八王子市）敷地内に保存されている。

<sup>4</sup> 池田冠山 鳥取藩支藩（後の若桜藩）藩主。『勝五郎再生前生話』を著した。武蔵国の地誌『武蔵名所考』などを編纂しており、中野村を含む多摩地域の地理には明らかなものと思われる。

国学者の平田篤胤<sup>あつたね</sup> 5 も「届書」を手にとると、勝五郎を呼んで話を聞きだした。この時、勝五郎は生まれ変わりについて話すのを嫌がったため、篤胤は家族や友人、そして、当時、篤胤の弟子となっていた天狗小僧「寅吉」<sup>6</sup> を使って、勝五郎から話を聞き出そうとした。彼らの協力を得つつ、篤胤は『勝五郎再生記聞』<sup>7</sup> という本をまとめるに至った。

同じ文政6年の7月、篤胤は自分がまとめた国学の本を朝廷に献上する目的で京都への旅に出た。このとき篤胤は、仙洞御所<sup>せんとうごしょ</sup> 8 の光格上皇に『勝五郎再生記聞』の写本（自筆原本）を貸し出している。御所の女房たちも勝五郎に強い興味を抱いていたようで、このとき預けた『勝五郎再生記聞』は、しばらく経ってから篤胤の許に戻ってきた。篤胤は、仙洞御所での叢覧を名誉に思っていたようである。

### 勝五郎と「江戸への旅」

さて、大人になった勝五郎は、程窪の須崎家との交流を続けながら、中野村で農業や籠作りを営んでいたと伝えられる。籠を売るために、中野村と江戸との往復もしていたようだ。大人になった勝五郎が、商売のために往復していた中野村と江戸との行き来は、いわゆる「旅」ではなかったかもしれない。

しかしきっと、大人になって地に足のついた勝五郎の日常を彩る「小さな旅」ではあったことだろう。成長してからも、周囲の人々から時折、生まれ変わりの話をせがまれていたという勝五郎。商いで江戸を訪れた際にも、ふと、はじめて訪れた時、大人たちから根掘り葉掘りの質問責めにあっていたことを思い出して苦笑していたのではないか。

そしてまた、勝五郎の生まれ変わり物語を日本や世界に広めることとなったきっかけは、幼い頃に祖母に手を引かれて歩んだ中野村から程窪村への道のりにあった。その道のりは、前世である藤蔵の記憶を遡るための、近くて遠い「この世の旅」であった。

### 参考文献：

『ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語 調査報告書』日野市郷土資料館、2015年。  
今井秀和『異世界と転生の江戸 平田篤胤と松浦静山』白澤社、2019年。

5 平田篤胤 江戸後期の国学者。国学四大人の一人。勝五郎からの聞き取りや届書などの資料をまとめ、そこに自分の考えを付して『勝五郎再生記聞』を著した。

6 寅吉 高山寅吉。天狗や山人の棲む異世界（幽冥界）と江戸とを行き来していると語っていた少年。平田篤胤は寅吉の語ることを信じ、『仙境異聞』としてまとめた。

7 『勝五郎再生記聞』 平田篤胤が勝五郎や周囲の人々からの聞き書きや、自分の考えをまとめて著した書。

8 仙洞御所 京都にある、退位した天皇のための御所。現在の「京都仙洞御所」。